

書籍「子どもの『心の病』を知る」を読んで

最近の青少年による事件を見聞きする度に、子どもたちがなぜ、こうした事件を起こす心情に至るのが気になっていた折、医療少年院に勤務する精神科医の著書「子どもの『心の病』を知る－児童期・青年期とどう向き合うか－」が書評で目に止まり、購読した（事件を起こした少年たちに関する内容でなかった点は、期待はずれ）。

著者が医療機関等に出合った子どもの「心の病」を、症例毎に、「ケース」、「データ」、「症状の類似する疾患」、「対応と治療のポイント」に整理され、また、巻末には「症例別索引」、「項目索引」も記載されており、子どもの「心の病」に関する概説書としては、活用できそう。

読み終えて、（医療だけに診断名が必要なのであろうが）臨床精神医学分野では、よくもまあ、こんなに〇〇障害、〇〇症というように、ラベリングというか、その多さにおったまげた！

読みながら、こんなに我がまま気ままで、いつもマイペースで厚かましい自分など、精神科的には幾つもラベルが付きそう。

また、「データ」に記載されている有病率、生涯罹患率等を合計すると、「おい！おい！100%を越えるのではないか？ これじゃあ、いわゆる普通と思われる人はいないのでないか？」と呟きたくもなった。

こうしたことから考えると、子どもに限らず人間みんな、こうした要素を持っているということであろう。

ただ、子どもは、まだ適応能力や言語能力が乏しいだけに、些細なストレスでも、直ぐに体の症状となって現れ易いのだろうと推察できる。

それだけに、「生きることを楽しめる力、大切な存在を信じ愛する力、自分自身を大切にできる力、といった生きることの根本を支える力を身につける」ために、子どもとのコミュニケーションに限らず我々も、やはりお互いにどう係わり合うかという観点（相互輔生）が必要な気がする。

「大人は子どもに教えて当然」というような一方向性でなく、日頃から、子どもである前に一人の人間として認め、双方向性のあるコミュニケーション（相互交渉）について、もっともっと注目されていいように思う。

まずは、我々大人が日頃からコミュニケーションについて思索する必要があると思え、そのヒントがあるような気がして、先日、書籍：「子育て ハッピーアドバイス」を紹介した（「雑学 BN」の「書籍等読後感関係（Ⅲ）」P、2006.03.04.：参照）。

（2006年3月17日 記）